

廬隱に関するこれまでの評価について

葛 城 明 子

The estimate of Luyin till now

Akiko KATSURAGI

一、問題提起

廬隱（1899年～1934年）への中国におけるこれまでの評価は次の通りである。まず五四時期を代表する女性作家で、当初は社会的問題を作品の中で取り上げ、いわゆる「問題小説」を多く書いて、同時期の女性作家冰心と名声を等しくした。しかしその後彼女は主に女性知識人の苦悩や悲しみをテーマにした作品を多く書くようになり、後に茅盾がそれを「廬隱の停滞」と評した。⁽¹⁾ また一方で茅盾はそれらの作品を、「当時の苦悶彷徨する、享楽主義の境界にいた青年の心理を反映していたという点から見ると、『海浜故人』及びその姉妹編『或人の悲哀』『麗石的日記』にはかなり高い評価を与えなくてはならない。」ともいった。⁽²⁾ つまり茅盾は廬隱の作品を、それが社会のある一面を反映しているかどうかで評価した。中国でのこれまでの廬隱評価は、茅盾の『廬隱論』に基づいており、このように否定的な評価と肯定的な評価がある。このことについて佐伯慶子氏は、「つまり、今日の廬隱の評価は、茅盾の『廬隱論』と『導言』によるものであるといっても過言でない。」と評した。^{(27) ①} しかし80年代以降、特に90年代に入ってから、それまで否定的評価の方が多かったのが、人々の文学観の変化と共に、次第に肯定的評価が大半を占めるようになってきた。本論では中国における廬隱への評価を30年代、80年代、90年代に分けて挙げながら、全体的に否定的な評価から肯定的な評価へと変わってきていることを論じたい。

茅盾は当初廬隱を高く評価した。それは、彼女が『小説月報』に立て続けに発表した最も早い時期（1921年から22年前半にかけて）の作品に対してだった。例えば『一封信』では農民の娘が極悪地主に無理やり妾にされる話や、『靈魂可以売嗎』では向学心に燃える少女が貧しさゆえに勉学を諦めさせられ、一日中紡績工場で働かされる話や、『兩個小学生』では軍閥政府への請願運動に参加した小学生が暴力で追い返される話など、彼

女は貧しく弱い立場にある人々のことを多く作品に書いた。その後22年12月の『小説月報』に発表した『或人的悲哀』や23年6月の『麗石の日記』から、専ら女性知識人の苦悩や悲哀を書くようになった。しかも内容だけでなく、形式もそれまでの叙事体から日記、書簡体になった。そのような内容や形式の作品で、彼女の代表作とされているのが『海浜故人』（『小説月報』23年10月、12月）で、中国現代文学史で廬隱が語られる時、この作品が挙げられなかったことはかつてない。また茅盾は『或人的悲哀』以降の作品は、対象が女性知識人に限られ、文学的には廬隱は停滞していったと評した。時代が前進している以上、この停滞は後退を意味するとまでいった。⁽¹⁾ この評価に対して佐伯氏は、「それはあくまでも、廬隱を『五四』の枠の中でとらえようとする一つの見方であって、廬隱は『“五四”運動の退潮とともに向きを変えはじめた』のではなく、習作を重ねていた過程で、彼女が本当に書きたくなかったのは、人生の悲哀、特に女の哀しみをテーマにした作品であった、という見方もできるのではないだろうか。⁽²⁷⁾ ①」と疑問を投げかけた。筆者もこの見解に賛成である。と同時に彼女がなぜ『或人的悲哀』以降作風を一変させて、女性知識人を中心に悲哀調の作品ばかり書いたのか。これに関しては、上の佐伯氏のほかに二人の日本人研究者による論述がある。本論では、中国における廬隱への評価の変遷を辿るほかに、日本人研究者による、廬隱文学の悲哀の背景についての論も見ていきたい。

二、これまでの廬隱評価

（一）30年代

廬隱についての中国での評価は、先に述べたように30年代に茅盾が書いた『廬隱論』に基づいているが、実は茅盾より早い時期、まだ廬隱が活躍していた頃、すでに廬隱に関する評論が出ていた。賀玉波氏の『廬隱女士及其作品』である。⁽³⁾ 賀氏は廬隱の経歴をあまり知らなかったようで、「最近彼女は若い恋人ができて、一緒に日本へ行きしばらく滞在していたが、もう帰ってきているらしい。彼女は以前確か恋人がいて或いは結婚していたようだが、不幸にも彼らは結婚後まもなく意見が合わず別れてしまい、彼女は長いこと孤独な生活をしてきた。⁽³⁾」などと書いている。確かに彼女は二度結婚しているが、最初の夫（郭夢良）は彼女との結婚後二年で、肺病（一説には胃腸病）を患って病死している。賀氏のいうように意見が合わなくて別れたのではない。

また賀氏は廬隱の『海浜故人』『淪落』『父親』『帰雁』などを挙げて廬隱の作品を評しているが、いずれも否定的な評価しか与えていない。例えば『海浜故人』は廬隱の学生時代から結婚までのことを書いた自伝小説で、多くの友人が出てくるが、描写という点では読者を失望させない程度に書けているが、「技巧の面では、彼女の力はまだ足りないことがわかる。描く人物が多すぎて精密さに欠ける。また技巧が古くさいことも不満な点だ。

例えばP 1 2 2第二段で各人の性格をそれぞれ述べているが、あれは必要ない。ちょうど旧劇で役者が登場して自己紹介するようで可笑しい。⁽³⁾」と述べている。『淪落』は幼いころ海に溺れかけたのを、ある青年に助けられた少女が、成人してその青年と再会する話だ。その青年は軍人になっていて、彼女は恩に報いようと、妻のいるその男の思うに身を任せる。後に彼女はある若者に求愛され、迷ったあげく自分がもはや処女ではないことを告白する。するとそれまで熱愛的だったその若者は、一変して別の女性と結婚する。賀氏にいわせるとこれは「最高の作品」で、「内容も描写も共に完璧で、読者に最も感動を与えやすい。⁽³⁾」が、「しかし作者の思想には結局頑固で保守的な面があり、どうも恋愛するなら処女でなければならないという信条を提唱しているようだ。⁽³⁾」という。この作品からはむしろ作者の処女偏重に対する強い批判が感じられるが、賀氏は全く逆に読んだらしい。次に『父親』は、ある青年が父親とその妾と三人で暮らすことになり、自分より一、二歳年上にすぎない、その若い妾の女性に恋してしまう話だ。賀氏によると「彼の父親が妾をもったのは、単に享楽主義のためだが、彼が父親に恨みを抱き、しかも父親の妾に恋慕するのも、同じく単に享楽主義のためにすぎない。彼ら親子は一人の女性を追求め、互いに利己的な享楽主義による衝突を招いたのだ。⁽³⁾」という。主人公の青年のその女性に対する真摯な愛を、賀氏は全く読み取っていない。また『帰雁』は、恋人を亡くしたある女性が失意と孤独のうちに、ある男性に思慕されるようになるが、その男性は終始彼女の心が理解できず、二人は苦しみやがて別れてしまうという話だ。賀氏はヒロインを評して、「彼女は男性への依存心が強く、何かあるとふらふらして定まらず、奮闘心と反抗心に欠け、頹廢的でロマンチックで行き着くところは意気消沈だ。だから彼女は最後に『ああ！落ちぶれた雁よ！私は安らぎを求めて帰ってきたのに、魂の傷を癒すために帰ってきたのに、私が得たものは何だろう？——ああ！ただ虚しさは更に深まり、傷は更に深まっただけだ！』（P 1 5 8）これが話の結末で、全編の題意でもある。⁽³⁾」と述べている。『帰雁』のヒロインは、夫の郭夢良を亡くした後の廬隱と重なり、相手の男性もモデルが恐らく実在したであろう。これに関しては中本百合枝氏が、「（その）モデルは当時法政大学の学生であった瞿冰森」と、具体的に人名を挙げている。⁽²⁷⁾ ② このヒロインは相手の男性の愛が真実のものではないことを見抜き、その男性と一緒にならなかった。彼女は精神的にとても自立した女性で、賀氏のいう男性への依存心が強い女性という印象は受けない。

以上挙げたように賀氏の廬隱の作品に対する評価は、いずれも否定的である。作家の経歴もよく知らないし、作品理解が一方的かつ表面的で、あまり適切とはいえない。廬隱の作品の日記、書簡体という形式についても、「このような体裁は例えば時間的な不統一など、構造上の困難は避けられる。が、メリットに比べてデメリットの方が多い。その顕著なものとして、作品が散漫になりやすく、読者も時々単調を覚えるようになることが挙げ

られる。……確かに小説に挿む書簡や日記が多すぎると、読者は混乱し易く、同時に描写に対する効果も失う。⁽³⁾」と述べている。しかし書簡や日記が時間の推移に矛盾しなければ、読者の混乱を招く虞は全くない。しかもこの体裁の方が、より直接的に人物の心情が読み取れて、むしろ作品の理解に役立つ。この賀氏の主張はよく理解できない。

賀氏は個別に作品を評価した後廬隠を評して、「作者は現実社会の組織に対してあまりに盲目的である。⁽³⁾」と述べた。つまり「彼女は自分の苦しみや悲しみを訴えることしか知らず、苦しみや悲しみの根源が何なのかわかっていない。ただ感傷や憤懣だけで、奮闘や反抗を知らない。⁽³⁾」と述べている。そこで「描写の対象をあの多くの圧迫され束縛されている労働者階級の婦人の身の上に移し、併せて現実社会の組織をまずよく研究し分析してほしい。技巧的には書簡や日記の体裁をなるべく用いないで、構造上もっと精密になるようにすべきである。⁽³⁾」と述べている。彼女の文学の本質、つまり女性知識人の苦悩——封建思想と個性の解放や恋愛の自由など新しい価値観との間で苦しむことの意味は、賀氏には理解されなかったようだ。教育を受けたがゆえに、理想と現実の遠い隔たりを感じずにはいられなかった女性知識人たちの苦しみは、社会の組織がわかれば消えるものでもなかったろう。その苦しみや悲しみを日記や書簡の形で綴ることに、何の不都合があったのか。賀氏の廬隠評価は的を外れたものだったといわざるをえない。

廬隠の生前の評価は全てこの域にとどまるものではなかった。次に廬隠の教え子たちによる廬隠追悼文の中の言及を挙げたい。廬隠は五四時期を代表する作家であると同時に、北京女子高等師範学校卒業（1922年）後は、各中学校で国語の教師を勤めた。34年に難産で亡くなる前の数年は上海の工部局女子中学校で教鞭を執っていた。彼女が亡くなった時、当時の生徒が追悼文を書いた。いずれも生前の彼女の熱心な指導に対する感謝の気持ちや、尊敬する先生を失った失意と悲しみが切々と綴られている。その中に廬隠の作品に関してふれた箇所がある。例えば「先生、先生！私が初めてあなたの“力”により、私の彷徨う心をまるごとしっかり掴まれたのは、あなたの『海浜故人』を読んでからです。あの時の私は十三歳の子供で、誰からも理解してもらえず、人からは変な子と呼ばれていました。過去十三年間私という子供の心はたいして何も感じなかったけれど、あの時『海浜故人』を読んでから、初めて人に理解してもらえない苦しみを感じ、私は変な子で、その時から私というこの変な子は、心の中であなたに会えることだけを望みました。しかし或いは私が子供だったからかもしれません。毎日毎日期待しましたが、結局あなたには会えませんでした。ところが二年後なぜか本当にあなたに会え、更になぜかその三年後にまたあなたと早々に別れることになりました。ああ、しかも永遠の別れだなんて！⁽⁴⁾」「私が新しい小説を読み始めたのは、やはり私が中学校に入った年で、当時私は作品の内容はあまりわからなかったが、最も注意していたのが作家の名前だった。特に数少ない女

性作家はそうだった。廬隱女史に対しては私の小さな頭の中で、だんだん深い印象をもつようになり、彼女の『海浜故人』は深く私の心の琴線に触れた。⁽⁵⁾「十二歳の年、私は兄や姉と漢口に住んでいた。姉の友達が『小説月報』を一部予約して姉に送ってくれた。私たちはよその土地に滞在していて、寂しさを紛らすのにちょうどよく、毎期送ってくる度にいつも私は奪うようにして開き、時には紙面を破くこともあり、姉に少し怨まれたりもしたが、私は気にも留めなかった。彼女が私に先に読ませてくれさえしたらよかった。何期だったか、私は偶然『或人的悲哀』をみつけた。この小説は続けて三遍も読んだ。私にとっても深い印象を与えたのだ。その他の本は読んでもすぐ忘れたが、この小説だけはその印象をぬぐいきれなかった。当時は著者が誰なのかも知らなかったが、私はとても幼いころに彼女の読者となり、しかも彼女の崇拜者の一人となった。⁽⁶⁾」

これらの追悼文から廬隱の『或人的悲哀』『海浜故人』などの作品は、十代の少女たちの間に共感と呼んだことがわかる。特に人に理解してもらえぬ孤独な少女は、廬隱の作品世界をそのまま受け入れたようだ。このように廬隱の20年代の作品に対して読者は、賀氏のように否定的な評価ばかり与えたのではなく、彼女の教え子たちのように共感を覚えた者もいたということだ。

次に茅盾の『廬隱論』である。冒頭で述べた通りそれは中国で廬隱が語られる時、これまで必ずといっていいほどまず挙げられ、その拠り所とされてきた。それはなぜか。まず彼の中国の文壇における地位がある。つまりリアリズム文学の第一人者とされる彼のいうことは、誰もが正しいとするいわゆる権威主義的な側面だ。次に社会性をもった文学こそ価値があるとされてきた中国では、廬隱の『或人的悲哀』以降の作品は、女性知識人の身の出来事や心理描写に限られているため、題材があまりに狭すぎて、社会に対して殆ど意味をもたないとされてきたのだ。また茅盾といえば、五四時期を代表する文学者で、文学研究会の発起人（十二人）の一人であり、同会機関誌『小説月報』の編集責任者でもあった。廬隱も1921年1月その成立大会に参加し、第一期の会員となった。会員番号は13、つまり発起人を除いて最初に入会した一人だった。⁽⁷⁾ ということは、恐らく発起人らととても近い関係にあったと考えられ、廬隱と茅盾は共に新文学の創造に関わった同志だったといってもよい。なのに彼女が難産死した直後に書いた『廬隱論』や『中国新文学大系・導言』は、時期的にもっと哀悼の調子があってもよさそうなのにそれがなく、かつての仲間にしては極めて冷静で、まるで知らない人に対する評論のようだ。

茅盾は廬隱を「五四（運動）の申し子だ」といった。⁽¹⁾ 五四運動とは、日本が対華二十一条の要求をつきつけた（1915年）後、陳独秀、胡適、李大釗、魯迅らが雑誌『新青年』を中心に繰り広げた言文一致運動、儒教批判、欧米の文学や思想の紹介、近代小説の創作などの文学革命に始まる。次いで1919年のパリ講和会議で日本の主権が認めら

れ、五月四日北京の学生数千人がこれに抗議し、集会やデモを行い、親日派の曹汝霖宅に放火するなどして、三十数名が逮捕された。この事件の後、運動は全国に波及した。この一連の愛国運動を総称して五四運動というが、その年の秋到北京女子高等師範に入学した廬隱も、学生会に入ってこの運動に参加した。1921年1月に成立した文学研究会に廬隱が即入会して、貧しく弱い立場の人々に目を向け、広く社会的問題を取り上げて、いわゆる「問題小説」を数篇書いたのも、そのような活動の延長上にあったと見るべきだろう。

文学研究会は茅盾、周作人、鄭振鐸らが中心となって活動した。五四運動の主張するところは、科学と民主、反封建主義、反帝国主義、婦人解放、恋愛の自由などだ。仮に当時運動に参加した青年たちのこれらの主張が心からのものであったなら、廬隱が封建包辦結婚の束縛を自ら解いたことに、その参加者の一人であった茅盾も一言ぐらいふれてもよかったのではないだろうか。廬隱は同郷会を通して知り合った、北京大学の学生郭夢良と結婚した。彼にはその時すでに包辦結婚（親同士が決めた結婚）による妻が故郷にいた。一方廬隱もその前に、ある親戚の青年と婚約していた。途中で二人の思想が合わないことがわかり、彼女から一方的にその婚約を破棄している。このようなことに踏み切るのは、当時いくら教育を受けた女性といっても、やはり勇気の要ることであった。茅盾がもし真に反封建思想の持ち主であったなら、廬隱が愛のない結婚をやめて、愛のある結婚を選んだことに関して、何らかの言及があってもよさそうなのに、茅盾は『廬隱論』でも『中国新文学大系・導言』でも、彼女の経歴や思想には全くふれていない。それはかつて共に新文学の創造を目指した仲間だったにしては、あまりに寂しく、もしかしたら彼は廬隱のそうした反封建的な行動を、あまりよく思っていなかったのかもしれない。

彼女と同年代の女性作家の謝冰瑩は廬隱を評して次のように述べている。「彼女の書いたものは、苦悶、憂鬱、感傷に満ち、同時に社会の旧制度に対して恨みを示した。特に封建勢力に対して彼女は、徹底的に攻撃した。一般の聖人君子や似非君子にもさんざん罵倒を浴びせた。これはわけのあることで、彼女が郭夢良と結婚した時、大きな打撃を受けたからだ。郭家の人から反対されただけでなく、彼女の親戚にも口汚く罵られ、ひいては彼女と何の関係もない世間にまで攻撃され、彼女は妻のいる人と結婚すべきではないと言われた。実は郭夢良と田舎にいたあの奥さんとは、もともと何の感情もなく、ただ『父母の命、媒酌の言』を受けて、無理やり結婚させられたのだった。廬隱はこの点からいえば、彼女は一番の英雄で、一切に堪えられる戦士だった！彼女は社会の一切の批評を顧みず、終始夢良を愛し続け、たとえ物質的に生活が苦しくて二度の食事に事欠くことがあっても、彼女は夢良とあちこち漂泊し、彼女らの精神的に自由な生活を送った。^⑥」当時青年たちが主張していた反封建主義の思想が徹底して真のものであったなら、廬隱のとった一連の行動をこのように評価するのが本当だろう。しかし当時反封建を主張した青年たちも口で

は反封建を訴えていても、いざそれを実際に行動に移す人が現れた時、心から応援することには、なかなか抵抗があったのかもしれない。まして廬隱のように自ら行動に移すとなれば、当然相当勇気の要ることだったろう。数千年来にわたって続いた思想とは、人々にとって実際はそう簡単に否定し去ることのできないものだったと考えられる。

謝冰瑩以外にも廬隱の死後、友人たちによって追悼文が書かれた。例えば劉大傑は「廬隱の作品の範囲はわりと狭い。彼女の文章には、社会の各方面に関する描写はあまり見られない。この点は冰心と同様、二人とも丁玲にかなわない。彼女らは社会の下層階級や暗黒部分に深入りしなかったので、それらの経験については、感じるものがあまりなかったのであろう。⁽⁹⁾」と述べ、劉濟群は「彼女が文壇で得た地位は、全く彼女自らが苦しい奮闘の中から得たものだ。彼女のあの強い意志と奮闘の精神は、人の模範足りうる。⁽¹⁰⁾」と述べた。いずれも友人たちは、廬隱という作家の通常の思想のあり方や行動範囲などを知っていたので、作品が社会性に欠けていても、肯定的に読むことができたようだ。

（二）80年代

廬隱の作品は30年代まではわりと読まれたが、その後あまり読まれなくなったようだ。唐弢は40年代に「廬隱の時代は過ぎ去った。廬隱の抱いていた感情はすでに今の時代の人々の感情と違い、彼女に対する冷淡さは、まさに非常に自然な結果である。⁽¹¹⁾」と述べた。80年代初めには、「廬隱——今日この名を知る人は少なく、口にする人はなお少ないだろう。⁽¹²⁾」と言われ、また83年に『廬隱選集』が出た時、「解放後廬隱の作品はずっと再版されたことがなかった。私たちの知る限りでは、これは解放後初めて出版される彼女の作品集である。⁽¹³⁾」と言われた。ちなみに作品集は1941年の『廬隱佳作選』（上海新象書店）と47年に36年初版の『廬隱選集』が再版された（上海中央書局）のを最後に、83年まで確かに出版されなかったようだ。⁽¹⁴⁾ 従って廬隱の作品は解放前から80年代初めまで、あまり読まれなかったと考えられる。その間中国では抗日戦争や社会主義革命、反右派闘争、文化大革命など社会的混乱が続いた。その間文学は人民に奉仕するものでなければならなかったもので、廬隱のように女性知識人の苦悩ばかりを描いた作家は忘れられ、作品も読まれなくなっていったと考えられる。

80年代に入り中国がそれまでの共産主義イデオロギー一色から、経済優先主義へと変わるにつれ、文学や思想の自由化が進んだ。時代の流れに沿って、それまで忘れられていた作家や文化大革命で否定された作家たちの作品が、再び読まれるようになった。廬隱の作品集が再び出版され、⁽¹⁵⁾ 廬隱に関する評論が再び書かれるようになったことも、それらと無関係ではあるまい。80年代の廬隱への評価は、大筋は茅盾の『廬隱論』と変わらず、肯定的評価と否定的評価が半々である。例えば一方では、「廬隱は“我” “情” “愁” の

三文字の小さな天地の中に留まり、更に広い社会生活や社会心理に発展させることができなかった。……廬隱の停滞は、小説の題材の停滞であり、彼女自身の活動範囲が狭く、これは五四の女性作家に共通し、丁玲がこれを初めて打ち破った。⁽¹⁶⁾」としながら、他方では「いわゆる情とは、五四時期に目覚めた人の情感の要求するところであり、いわゆる智とは、伝統社会においていたるところに存在する道徳的束縛である。廬隱はこの情と智の衝突を描き、伝統社会の中で困いを取っ払って出た青年たちの苦悶、彷徨、憧憬、悲哀を反映し、この新旧の転換期におけるすこぶる普遍的な社会心理を記録した。……廬隱は自分の個人的な悲哀を多く書いているが、彼女の悲哀は決して個人的な意義にとどまらない。⁽¹⁶⁾」という具合に、やはり否定的にも肯定的にも評価された。

但しそれまでみられなかったこととして、廬隱の後期の作品への見直しがなされるようになったことは、注目に値する。廬隱の後期の作品とは、1930年代の作品を指し、例えば彼女が李唯建と日本へ渡り、およそ四ヶ月間滞在した時に見聞したことを散文にまとめた『東京小品』（30年～31年）や親友の石評梅とその恋人高君宇のことを書いた『象牙戒指』（31年）、上海事変「一・二八」を描いた『火焰』（32年）、ある既婚の女性知識人の恋愛と苦悩を描いた『女人的心』（33年）などである。これらの作品に関する評論では、「30年代初期になると、だいたいこれらの不足（長い間創作の題材を女性知識人個人の情感という狭い天地に限っていたこと。＝筆者注）を意識したのだろう。彼女は努力して、題材面において開拓を行った。この点を説明するには、彼女が書いた長編小説の『火焰』があり、これは1932年上海の『一・二八』抗日戦争を題材とした社会小説で、書き方からして大型の報告文学のようだ。これらの作品はみなこの『五四』時代に名を成した女性作家が、体内にやはり社会活動の熱気をとどめていたことを表明している。⁽¹³⁾」更に「茅盾が『廬隱論』を書いた時、まだ彼女の後期創作の三部『象牙戒指』『火焰』『東京小品』（『女人的心』などを含む）は出版されていなかったもので、茅盾がそれらに対して、言及や評価を与えなかったのも無理はない。しかし私たちは今日、彼女の後期の作品を通して、もう一度廬隱の作品を新たに研究し、茅盾の四十数年前の結論に拘泥すべきではない。⁽¹⁷⁾」という提起もなされた。

これらの主張は、それまであまり顧みられなかった後期の作品にスポットを当てたという意味で重要だ。しかも「発展という視点から見ると、廬隱の後期の創作は、思想内容或いは芸術的技巧に、いずれも早、中期の作品より、明らかな進歩が見られる。⁽¹⁷⁾」という。しかしその評価を支えているのは、後期の作品に見られた進歩だけでなく、「文学は人民に奉仕すべきだ」という考えではなかっただろうか。なかでも『火焰』は上海事変のことを書いたもので、戦争というとりわけ社会的なテーマであったことが、特に重視されたのだ。つまり作品の価値が文学的表現力や内容の深さではなく、何よりテーマが社会的であ

るかどうかで決められているということだ。この意味では、茅盾の考え方をまだ引きずっているともいえる。とすると後期の作品が見直されたのも、まず『火焰』という作品があったからかもしれない。なぜなら散文集『東京小品』は別として、あとの二篇を含む他の大部分の作品は、実質は内容的にも表現的にも、早、中期とたいして変わらないからだ。それを裏付けるかのように、次のような言葉もある。「しかし廬隱は結局廬隱に過ぎない。三十年代の女性作家丁玲や蕭紅らに比べると、彼女は明らかにやや劣る。彼女は主観的には革命に近づき、労働者や農民に接近した。しかし客観的には真に社会の実生活に深く入り込んだ訳ではない。⁽¹⁷⁾」つまり廬隱を肯定的に評価するのは、あくまで社会的意義をもつ作品が対象で、それ以外はあまり文学的価値を認めないというわけだ。この意味では、80年代も30年代と基本的に変わらなかったといえる。後期の作品で『火焰』という作品だけは、その題材が抗日戦争という社会的なテーマであったので、それを中心に彼女の後期の作品を特に高く評価した。これではあまりに題材偏重に陥っている。

しかし80年代に40年代以降途絶えていた廬隱研究が再開されたことは確かで、評価の対象もそれまで初期のいわゆる「問題小説」と『或人の悲哀』以降の女性知識人を描いた作品群との比較にとどまりがちだったのが、後期の作品への見直しという新たな展開を見せた。ただ作品の価値を、テーマが社会的であるかどうかだけで評価したという点では、30年代以来の廬隱評価と基本的に変わらなかったといえよう。

(三) 90年代

中国は80年代後半あたりから、社会情勢の急速な変化に伴って、人々の思想や関心の対象が変わってきた。文学に対しても、以前のように「人民に奉仕するものでなければならない」という考えから、それぞれの要求に合ったものへと多様化しつつあり、作家もある意味で個性化の時代に入っている。廬隱への評価はどうだろうか。90年代に入って、廬隱を含む五四時期の女性作家に関する評論がよく書かれるようになった。それは80年代以降、当代文学において女性作家の活躍がめざましいことや、欧米からのフェミニズムの流入や、95年9月の北京での国連世界女性会議の開催に伴う意識の高まりなども、その背景にあると考えられる。80年代の後半あたりから女性文学は徐々に盛んに取り上げられるようになり、五四時期の女性作家たちも、その対象外ではなかった。廬隱もその一人で、80年代に作品集が出版されたことは前に述べたが、90年代に入ってからと同様に作品集や評伝が出版されている。⁽¹⁸⁾ このように女性文学への関心が高まるなか、90年代前半は特に五四時期の女性作家に関する論文が目立った。量的に増えただけでなく、質的にも80年代と90年代では大きく変わっている。80年代は先に述べたように、廬隱への評価は30年代と基本的に変わず、肯定的、否定的のいずれもあり、茅盾の『廬

隠論』と同じ評価である。それに対して90年代の評論は、女性知識人の苦悩、情感を描いたことに対する否定的論調が殆どなくなり、大半がその社会的意義を認めている。次にその幾つかを紹介したい。

「彼女と彼女の人物の生きた時代は、まさに希望と幻滅の相交錯する年月で、彼女は新旧の入れ替わる時期に存在する普遍的な社会心理を真に反映した。……廬隱の時代の最も強い音には属さないけれど、反封建の絶叫といえることができる。そのため、悲哀や感傷は廬隱の誤りではない。⁽¹⁹⁾」「彼女の成功にしろ、彼女の停滞ひいては失敗にしろ、廬隱がまさに彼女の精神世界を筆の先に保持し、青天白日の下にさらす勇敢者であり、彼女は始終心の世界を作品の世界に統一させた。⁽²⁰⁾」「『海浜故人』の七篇⁽²¹⁾は、明らかに廬隱が社会的意義に対して注意を払っていたことを証明している。その後個人的な不幸により、相当長い間悲哀情緒に支配され、彼女がこの時期に創作の中で表したのは、伝統的に弱い女性の悲しい泣き声ではなく、環境に抑圧されても墮落に甘んじない、屈服しない女性の苦しい叫びであった。廬隱は作品で内心の傷みを腹を割って話し、人生の苦痛を『社会の悲劇』と見ていたことは、それ自体社会への訴えや批判を含んでいた。⁽²²⁾」

このような廬隱文学への肯定的な評価は、廬隱個人への評価を改めたというよりも、先に述べたように女性作家全体への見直しから、二次的に起きたと見る方が自然であろう。特に五四時期の女性作家に対する再評価は、幾つもの論文の中で行われ、その大半が肯定的な評価である。例えば「(五四の)女性作家たちは、作品の中に自分の情感を込め、自分の心を率直に表し、自分の運命を通して現実を反映し、……自分の作品の人物を通して、当時の社会の一つの側面を反映した。これは読者に真実感を与えるだけでなく、その内容はある程度現実的な意味をもっている。⁽²³⁾」というようにだ。以前は五四時期の女性作家といえど社会を知らず、自分の世界を描くことしか頭になく、そのような作品の内容は当然一般労働者の生活からかけ離れていて、社会性をもたないいわゆるブルジョアジーの文学であり、あまり価値のないものとされてきたのに比べると、限られた世界ではあっても、それなりに社会の一面を反映していたと認められるようになったということは、人々の文学に対する考え方が変わってきていることを意味する。

では現在中国の女性文学史の中で、廬隱はどのように位置づけられているのだろうか。まず廬隱は五四時期の女性作家の中で、最も早い時期に女性知識人の心理を描くことで、現実のある側面を反映し、中国の現代女性文学の中で先駆的存在だったと考えられている。例えば「五四の女性作家の小説創作は、まさに廬隱から真に一種の新しい価値、意味を獲得した。なぜなら廬隱の小説創作は、多くの内容が充実しており、深く人物の心理描写が感じられるからだ。……特に五四の全ての作家で、廬隱のように優美な感じを脱したややヒステリックな現代女性の焦燥と憂鬱を帯びたものを捜すのは難しく、これはまさに新文

学芸術世界の絶響だ！⁽²⁴⁾」と評したり、当時廬隱と名声を等しくした冰心と比較して、廬隱の方が社会に対する洞察が深いという評価もある。「廬隱が暴露した社会問題は、冰心よりもっと鋭く深刻だ。冰心は弱者のために発言したが、まだ廬隱ほど問題の見方は深くなかった。……廬隱の問題小説は、集中して女性意識の感情のもつれを体現した。廬隱の（作品の中の）女性の愛情や婚姻や運命に対する関心や思考の深さは、冰心の遠く及ぶところではない。⁽²⁵⁾」と廬隱の方を高く評価するものもある。

90年代に入ってから、このように廬隱への評価が高くなった背景には、先に述べたように女性文学への関心の高まりやフェミニズムの流入などによるところが大いにある。彼女は五四時期の女性作家の中でも比較的早い時期に女性知識人の苦悩を描いた一人で、新しい文学芸術を展開させた。中国の現代女性文学において、反封建というテーマを女性の立場から書いたのは廬隱や冰心、馮沅君、石評梅、凌叔華らが最初で、その後丁玲に受け継がれていったというのが、一般的な見方の特徴である。例えば「まさにこのように潑刺として率直で、道義上後へ退けない創作が、新文学の領域の中で、女性文学という一代の新潮を開き、人々に次の丁玲の出現に対する心の準備をさせた。⁽²⁴⁾」「五四の文壇で、廬隱も明らかに父権の女性に対する抑圧に反抗し、個性解放と愛情の幸福を追求した突出した作家だ。……作品中の女性は世俗の偏見を蔑視し、伝統的礼教と封建倫理思想の束縛を打破し、一般人にない勇氣と力を表現した。しかし伝統による惰性と環境の作用により、彼女らの心の苦しみ、孤独、寂寞は逆に終始減ることはなかった。……やや後に丁玲が『韋護』や『莎菲女士的日記』で更に多く触れ、更に深い味を出している。⁽²⁶⁾」というように中国の現代女性文学において、家父長制批判というテーマを女性の立場から描いたのは廬隱ら五四時期の女性作家に始まり、その後丁玲へ受け継がれていったという見方は、ほぼ定着しているようだ。

以上のように、90年代の廬隱に対する評価は総じて肯定的である。それは廬隱という作家一人についてだけでなく、五四時期の女性作家全体についていえることである。また現代女性文学においては、廬隱は五四時期を代表する作家であり、当時封建思想の根強く残る社会において、苦悩する女性知識人の恋愛、結婚、仕事、人生観などを率直に述べた。それはその後他の五四の女性作家を経て丁玲に受け継がれ、更に発展していった。廬隱はその意味で、中国現代女性文学の礎を築いた一人だといえよう。この肯定的な評価を与えた際の基準は、一つはやはり作品に社会的意義があるかどうかにある。廬隱たち五四時期の女性作家の作品の内容は、彼女たち個人の問題にとどまらず、広く当時の青年たちの心理を反映していた。それは現実のある面を反映していたと考えられた。その意味での肯定的評価は、冒頭で述べたように30年代に茅盾も与えていた。この意味では90年代も30年代、80年代と変わらないといえる。が、90年代はその社会的意義が全面的に認め

られている。つまり女性知識人の苦悩を描くことは、もはや個人的な意味にとどまらず、現実のある面を反映しているということが、これまでになく強調されているのだ。90年代における廬隱への肯定的評価のもう一つの背景には、女性文学の視点からの読みがなされるようになったことがある。五四時期の女性作家は、現代女性文学において、先駆的存在であったことが改めて評価されたのだ。廬隱の作品もこの社会的意義と現代女性文学の先駆的存在という二つの価値が認められて、それまで否定的と肯定的の両評価があり、しかもどちらかというとな否定的評価が大半を占めていたのが、90年代はほぼ全面的な肯定評価へと変わった。但しそれはあくまで廬隱を五四時期の女性作家の一人として評価しているのであって、廬隱個人を取り上げて、その文学の独自性に対して、特に高い評価を与えたわけではない。特に『或人的悲哀』以降の悲哀文学に関する評価はまだ行われていない。つまり彼女がなぜ悲しみに満ちた作品を多く書いたのかということは、中国では今まであまり問題にされなかった。この件に関しては、日本の研究者による論文がある。量的には少ないが、それぞれ注目に値する。次に紹介したい。

(四) 日本での評価

これまで日本で書かれた廬隱に関する論文は、筆者の知る限りでは非常に少なく、70年代一篇、80年代一篇、90年代二篇（同一の著者による）の計四篇である。⁽²⁷⁾ 70年代以前（戦前を含む）も書かれたようだ。佐伯氏によると、戦前に『東京小品』の中の四篇と小説『飄泊的女児』が『苦悶する支那』（中山樵夫訳、1941年、万里閣）に邦訳されているという。その中に訳者による作家紹介があって、「黄廬隱、女ではあったが、彼女は現代の中国人に共通の物の見方を最もよく書き表わした作家の一人であった。」（文中「支那」は「中国」に書き改められている）とあるそうだ。⁽²⁷⁾ ① 日本では中国の現代文学で女性作家といえば、一般に冰心や丁玲、蕭紅はよく取り上げられるが、廬隱はあまり知られていないのか、文学史においてこれまであまり言及されなかった。中国で40年代以降80年代初頭まで、殆ど論じられることがなかったことが、恐らくその原因の一つであろう。中国で半世紀近くの間人々に忘れられていた廬隱が、今一般の読者にも読まれるようになった。日本でも今後読まれることを願いつつ、これまでの日本における評価を振り返りたい。

まず佐伯氏の論には、「廬隱といえば『海浜故人』』というそれまでの固定観念を打ち破ろうとする姿勢が見られる。佐伯氏によると、『海浜故人』は、現在でも廬隱の代表作とされており、多くの文学史がこの作品をとりあげて廬隱を紹介しているが、『海浜故人』のみを彼女の代表作とすることには不満を感じざるをえない、というのがこの小論を書く動機でもあり、また目的でもある。⁽²⁷⁾ ①」として、『海浜故人』以外に『曼麗』『靈海潮汐』

など中期の作品集に収められた作品を一通り挙げて解説しているほか、後期の『象牙戒指』以降の作品の作風の変化に注目している。「『象牙戒指』以来、彼女の作品から、廬隱独特の感傷的な語り口は消えている。ということは、この作品を最後に、彼女が作家として新しい出発を決意した、ととれる。『象牙戒指』に過去の自分の哀しみ、苦しみを埋めて心機一転し、強く生きていこうとする彼女の姿勢が、次の言葉からもうかがえる。『この大転換のあと、私ははからずも悲哀のどん底からぬけ出すことができた。今は作品を書くにも、自分のことにはこだわらなくなった。換言すれば、私のものの見方がかわり、個人の存亡だけを考えず、私のまわりの人たちのことを考えるようになったともいえよう。』^{(27) ①} 後期の作品の中で『女人的心』は当時手に入らなかったらしく、佐伯氏も言及には至らなかったようだが、『東京小品』『火焰』は取り上げている。特に『火焰』には佐伯氏も注目していたようで、「一九三〇年代の前半に、殆ど誰も書かなかった上海事変を、女流作家が書いたという事実、しかもその作家がほかならぬ廬隱だったという事実は注目すべきだろう。……もし茅盾が『廬隱論』を書く前に、この『火焰』を読んでいたら、『廬隱論』は全くちがったものになっていたかも知れない。……ともかく『火焰』は、のちに文学史でなぜかまともにとりあげられたことがない。^{(27) ①}」と述べている。佐伯氏はこのように廬隱の前、中期の作品より後期の作品を高く評価し、とりわけ『火焰』に注目したという点で、先に挙げた中国の銭虹氏と共通している。しかも佐伯氏の方が十年早くその論を発表している。もっとも銭虹氏は佐伯氏より恐らく20歳ほど年少で、廬隱研究を始めたのは、彼女がまだ大学の学部生だった80年代後半なので、⁽²⁸⁾ 二人の論文の後先を比較してもあまり意味がない。が、両氏の廬隱論は、廬隱の後期の作品、とりわけ『火焰』に注目した点で一致している。

次に中本百合枝氏の論を紹介したい。中本氏は廬隱の作品に見られる悲哀の表現を中心に、廬隱文学を分析している。中本氏は廬隱の母親の愛情を受けずに育った生い立ちに注目し、廬隱の作品が悲哀情緒を基調としているのは、作者の悲しい生い立ちに原因があると主張する。廬隱は誕生したその日に外祖母が亡くなったため、両親特に母親から不吉な子として忌み嫌われ、家族から疎まれるなど、愛情に恵まれない幼年時代を送ってきた。特に母親の愛情を受けずに育ったことで、成人して不幸な人々の悲しみを理解し同情し、小説に書くようになったと中本氏は考える。それが多くの作品に悲哀情緒をもたらしたというのだ。「(廬隱には) 社会問題を主題とした数篇の作品もあるが、これらは茅盾が言うように『客観的写実主義』によるものではなく、家族から虐げられて生きてきた作者が、同じように社会から虐げられている人々に対する同情から生まれたものと考えた方が妥当ではないだろうか。茅盾は、五四運動が停滞すると廬隱も停滞したと言うが、彼女のこういった弱者に対する態度は終生変わっていない。^{(27) ②}」と述べている。

廬隱の悲哀については、彼女が学生時代に読んだショーペンハウアーの厭世哲学から影響を受けたということも考えられるが、中本氏は懐疑的である。「廬隱の悲哀は幼少期から培われ、愛する人々の死によって増幅された。自伝の中で、ショーペンハウアーの影響を受けてから悲哀が自分の中心思想になった（『廬隱自伝』91）と述べているが、ショーペンハウアーの思想は、彼女の中にある悲哀を明確な形で認識させただけではなかったろうか。廬隱に悲哀の情をうえつけたのは、生まれたその時から彼女を嫌った母親に他ならないと私には思われる。自分の中の悲哀を実感として理解し得る李唯建に会うことによって、彼女の作品は大きな変化をみせはするが、不幸な人々を共感者の立場からみつめるその観点は一生変らない。^{(27) ②}」と、廬隱の作品に表れた悲哀の背景には、生まれると同時に母親から嫌われながら育った生い立ちがあり、その悲哀感情から貧しく不幸な人々への同情が生まれ、それによって作品を書くようになったとする。

ここで一つ付け加えたいことは、廬隱の悲哀に満ちた生い立ちや作品内容ばかりを強調すると、作者自身が相当な悲観論者のように思えるが、実際はどうだったのか、ということだ。彼女の友人たちによると、廬隱の性格はそうばかりでもなく、明るく豪快で冗談好きで、よく人を笑わせたという。例えば上海で彼女と親しかった劉大傑によると、「廬隱は『海浜故人』の中で、ヒロインの露沙の相貌や性情について、『露沙は顔も体も痩せているが、そのわりに力強い。友人たちは彼女を称えて『山椒は小粒でもぴりりと辛い』という。彼女の性格はさっぱりしているが、たいへん思慮深く、この世の謎をあたかも知り抜いているようでいて、人には冗談ばかり言っている。』と書いているが、『海浜故人』は廬隱の前半生を描いた自伝であり、露沙は廬隱自身で、上の文章は彼女自身の相貌と性情をいきいきと正確に描き出したものである。⁽⁹⁾」という。また「彼女の個性はとても強く、殆ど何事も自分で決めなければならなかった。彼女は表面的には楽天主義者だが、内心は逆に悲観的だった。時には酒に酔って、たまに彼女の悲惨な運命と悲しい過去について語っては泣き出したりしたものだ。しかししばらくすると、彼女はまたハハハと笑って、自分はこれで楽しいふりをしているのといったものだ。⁽⁹⁾」ともある。要するに彼女は普段友人たちの前では、明るく楽天的に振る舞い、心の奥の悲しみはあまり表に出さなかったということだろうか。同じく上海の親しい友人であった劉濟群によると、「私の見る限りでは廬隱の性格は強くて男性的な部分が幾らかあるが、彼女の生活態度はロマンチックでその実きちんとしていた。⁽¹⁰⁾」という。廬隱は友人たちの間では明るく楽天的でさっぱりした人だったが、実は心の奥に幼年時代からの悲哀情緒を秘めたところがあって、それは普段は表れず、往々にして文学の中にはっきりと表れたと考えられる。

作者の性格と作風との間の隔たりについては、廬隱自身も認めている。「文章では私は感じ易く愁い多く弱い人間だ。——なぜなら一切の悲しみや騙された事実を、私は文章を

書く時になってはじめて思い出すからだ。しかもそれは私が文章を書く唯一の対象かもしれない。しかし実際の生活では、私はさっぱりして物事にこだわらない人間なのだ。私の文章を読んだことのある人で、私に会ったことのない多くの人が、私は元気がなく、浮かぬ顔をした女性だと思っているが、仮にある日その人たちがどこかで私を見かけたら、私の屈託のない笑いと子供じみた行動を目にして、きっとひそかに驚いて、『なんだ彼女はこんな人だったのか、どうして彼女の文章と少しも似ていないのだろう！』というだろう。このことでは私自身も時々、いったいどっちが本当の自分なのだろうと、不思議に思うことがある。……いうのも変だが、私は文章が書きたい時はいつも、私の心は次第に雲に覆われ、深く悲哀の境地に沈み込んでしまうのだ。文章を書き終わって私が筆を擱きさえすれば、私の魂はすぐに色が変わって、何の懸念もなく生活し、心からの笑いが出るのだ。⁽²⁹⁾」と述べている。廬隱の文学は、精神の深いところと結び付いていたと考えられる。本人も普段の生活では意識していないことが、作品に表れたとも考えられる。以上のことから、作者本人の性格と悲哀情緒に満ちた作品の雰囲気は、必ずしも一致していなかったといえる。

最後に土屋肇枝氏の論を挙げたい。中本氏が廬隱文学の悲哀は作者の悲しい生い立ちと関係があると考えたのに対し、土屋氏はあくまでショーペンハウアーの厭世哲学からの影響を主張する。『『遊戯人間（＝この世を弄ぶ、筆者注）』とは、茅盾の指す一九二一年頃の青年の心理を描写しただけのものではなくて、人生あるいは生きるということについて廬隱がショーペンハウアーを通して得た認識を、端的に表現したものだ考える方がふさわしいと思う。⁽²⁷⁾ ④』という。「遊戯人間」は『或人の悲哀』その他の作品に出てくる言葉で、主人公の女性知識人が人生とは何か、愛とは何かと悩み、世の中の汚い現実を見て全てのことを否定し、「人生に究極なんてない。全て演劇のように、墨を塗って仮面をつけてない者などいない。……世の中の出来事は芝居で、神聖な愛もあてにならない。初めは皆愛し合って婚約し、後は憎んで離婚する。全てのことが皆あてにならない。⁽³⁰⁾」と感じ、「遊戯人間吧！＝この世を弄ぼう！」という結論に達するのだ。この厭世観を土屋氏はショーペンハウアーの哲学からの影響だと考えた。これについても廬隱自身、「私はちょうどそのころショーペンハウアーの哲学を読んでいて、彼の『この世は苦海なり』という言葉は深く心に留めた。だからこの時悲哀は私の思想の骨子となり、どんなものも私のこの灰色の目に入ると、悲哀の色調に染まることになった。⁽²⁹⁾」と述べている通り、ショーペンハウアーが廬隱の思想や文学に与えた影響は否定できない。

また五四運動の挫折当時は廬隱に限らず、多くの青年たちが人生とは何か考える傾向にあった。土屋氏によると、「五四運動の挫折によって若者が自分自身に関心を向け出したからだろう、このころの雑誌には人生問題——もしこれに恋愛や結婚問題も含めるならそ

の数は大変多くなる——に関する文章があちこちに見られる。また文学研究会の例会では王統照や許地山や瞿世英がいつも熱心に人生や文芸に関する問題を討論していた。^{(27) ④}」という。そのような時代にあって、「廬隱の身辺を見ると、彼女にはショーペンハウアーの哲学に詳しい友人たちのいることが分かる。ショーペンハウアーの翻訳紹介を手掛けた、文学研究会メンバーの瞿世英、王統照、耿式之である。廬隱の夫の郭夢良と特に親しかった瞿世英は、廬隱とも文学研究会結成以前からかなり親しかったようで、彼女の哲学熱に郭と一緒に一役買っていたようだ。瞿の専門は西洋の近代哲学でドイツを中心に研究しており、もちろんショーペンハウアーにたいしても、厭世主義でひとくりにできないことまで目配りがきいていたと思われる。……また王統照は『叔本華與哈兒特曼對於美学的見解』を発表しており、ショーペンハウアーの美学に詳しかった一人といえるだろう。^{(27) ④}」と土屋氏は述べている。廬隱がショーペンハウアーの哲学をただ読むだけでなく、それを理解するのに、周りの友人たちに専門家がいたので大いに助かった。しかもそれが廬隱の血となり肉となった可能性は十分ある。

土屋氏は先に挙げた『廬隱自伝』の一節を指して、「悲哀が廬隱の創作の原動力として働き出したころ、ショーペンハウアー哲学の強い後押しがあったというこの記述は意外に注目されていない。廬隱の作品があまりによく彼女の人生と対応し、それより有力な悲哀の理由が必要とされなかったからだろう。廬隱にとって悲哀自体はショーペンハウアーとの出会いから生まれたものではなく、幼いころから彼女の中に芽生えていたものである。しかし悲哀を通して得た彼女の人生観は、むしろショーペンハウアー哲学から強い影響を受けているのではないだろうか。^{(27) ④}」と指摘する。これを中本氏の論と比べたい。両氏はいずれも廬隱の作品を悲哀という視点から語っている。悲哀の原点は作者の悲しい幼年時代にあるということと、ショーペンハウアー哲学からの影響でもあるということとを、共に認めている。違うのは廬隱の作品が悲哀を基調としている背景にあるものとして、そのどちらを重く見るかということだ。中本氏は幼少期に母親に愛されずに育った生い立ちを重視し、土屋氏はショーペンハウアーからの影響を重く見ている。ただ両氏の論は廬隱の作品全体について述べたもので、各作品の悲哀の背景について、例えば『海浜故人』という作品がなぜ生まれたのか、その中の何が悲哀なのかという具体的な悲しみのわけについては述べられていない。それは上で見てきたように、中国においてもまだ研究されていない。この意味で廬隱研究は現在のところ、中国でも日本でもその全体像がほぼ明らかになった段階で、各作品の分析はまだ行われていないといえる。それは廬隱文学を真に理解し、女性文学史や現代文学史の中で、廬隱を正当に位置づけるのにぜひ必要なことで、今後の研究課題である。

三、これからの廬隱研究に求められること

廬隱についてはこれまで主として全体的な評価がなされてきた。中国では30年代に茅盾によって、廬隱の作品は初期の「問題小説」を除いて、テーマが女性知識人の愛情や苦悩などに限られていて狭く、これは彼女の停滞或いは後退を意味する、という評価が与えられてから、それが廬隱評価の拠り所となった。80年代は銭虹氏により、廬隱の後期の作品が再評価され、特に上海事変を扱った『火焰』は社会性のある作品として高く評価された。しかし「文学は人民に奉仕すべきだ」という文学観の下、廬隱への評価はあくまで題材的に社会性があるかどうかという基準で決められ、その意味では30年代の考え方と基本的に変わらなかった。90年代は、80年代以来の女性文学の台頭や欧米からのフェミニズムの流入などにより、女性作家への再評価が盛んに行われるようになった。廬隱もその対象の一人で、彼女を含む五四時期の女性作家——冰心、馮沅君、石評梅、凌叔華などが各作品において、女性知識人の苦悩——教育を受けたがゆえに、封建思想と新しい価値観との間で、恋愛、結婚、仕事、人生などについて悩まなければならなかった苦しみ——を率直に描いたことは、当時の青年心理をリアルに反映していたという意味で社会性があり、また文学において女性の立場から封建家父長制への批判を行ったという意味で、中国現代女性文学の先駆的存在であったことが、改めて評価されるようになった。

廬隱はその中でも最も早い時期に、女性知識人のことを書いた作家である。その作品の多くは悲哀に満ちており、常に「人生とは何か」「女の人生とは何か」という命題をかかえていた。中国ではそのこと自体（廬隱がなぜ悲しみに満ちた作品ばかり書いたのかということ）はあまり問題にされず、これまで全体的な評価に終始してきた。この問題は日本人研究者による廬隱評価の主要なテーマとなった。佐伯氏は「習作を重ねていた過程で、彼女が本当に書きたくなかったのは、人生の悲哀、特に女の哀しみをテーマにした作品であった、という見方もできるのではないだろうか。^{(27) ①}」と考えた。中本氏は「廬隱の悲哀は幼少期から培われ、愛する人々の死によって増幅された。^{(27) ②}」とその生い立ちに注目した。一方土屋氏は「悲哀を通して得た彼女の人生観は、むしろショーペンハウアー哲学から強い影響を受けているのではないだろうか。^{(27) ③}」と彼女が学生時代に読んだショーペンハウアーの「この世は苦海なり」の厭世哲学からの影響に着目した。いずれも作者の経歴を作品と結び付けて考えるという点で一致している。これは廬隱に限らず、日本の研究者が文学作品を一般に作家その人と結び付けて考える傾向にあることにもよる。

廬隱がなぜ悲しみに満ちた作品ばかりを書いたのかという問題については、これまで彼女の作品全般を対象にして考えてこられたが、今後は各作品の中で考えていくべきであろう。いろいろな研究方法があるだろうが、筆者はそれを各作品中の人物に注目して見てい

く必要があると考える。人物についてはこれまで廬隠といえば自伝風の商品が多く、主人公は作者自身という印象が強くあった。しかし各作品を読んでいると、主人公は女性知識人ではあっても、必ずしも廬隠その人であるとは限らない。むしろ大半がそうではなさそうだ。つまり作品の基調が悲哀であることは、作者の精神世界とつながっているが、そのことと作品の主人公が誰をモデルにしているかということは別問題である。従来の研究ではこのことはあまり問題にされなかった。廬隠の商品といえば『海浜故人』がまず浮かび、『海浜故人』の主人公露沙は廬隠その人で、他の人物は廬隠の学友たちであり、廬隠のその他の作品は一般にあまり取り上げられなかったので、『象牙戒指』のヒロインが親友の石評梅である以外は、廬隠の商品は自伝風の商品が多く、主人公はたいてい廬隠その人だということで、人物についてはこれまで特に問題にされなかったのだ。なかには『彷徨』『帰雁』『地上的楽園』のように、廬隠自身のことを書いたと思われる商品も確かにあるが、大半の商品はそうではない。

例えば『或人的悲哀』の主人公は、廬隠その人ではない。主人公の垂俠は心臓病を患っていて、それに神経衰弱が重なって入院していたが、調子がよくなって退院し、留学中の兄を頼って日本へ療養に行く。日本滞在中に体験したことや感じたことは、作者自身の体験と重なっているかもしれない。廬隠は1922年の春から初夏にかけて、大学の卒業研修旅行で、学友たちと日本へ行っている。この『或人的悲哀』はその年の12月に発表された。が、垂俠の人物描写や他の人物との関わりから判断して、主人公は部分的に作者の影を留めているが、作者その人とは考えにくい。また同性愛に苦しむ女性知識人を描いた『麗石の日記』も、内容から廬隠その人のことを書いたとは考えにくい。麗石は同級生の沅青と互いに慕い合い、将来を共にすることにした。それを知った沅青の母親が沅青を天津にいる親戚の青年に会わせて、何とか沅青を麗石から離そうとした。沅青の心は次第に青年に傾き、ついに彼と結婚することになる。麗石は失望し心臓病が悪化して病死する。この二篇はいずれも悲哀を基調とし、最後は主人公の死で終わる。主人公の人物描写や商品の背景にあるもの、人物像や内容の特異性を考えると、作者のことを書いたとは考えられない。商品が悲哀を基調としているからといって、対象が作者であるとは限らないのである。今までの廬隠研究ではこの点あまり明確にされてこなかった。それでは上の二篇のように説明しきれない部分が残るのである。

そこでこれからの廬隠研究では、個別の商品研究に重点を置くべきであろう。その際、各商品の人物を中心に商品分析を行うことは有効な方法である。そのことは廬隠が商品で表そうとした悲哀へのより深い理解へとつながっていくだろう。今まで廬隠の商品といえば自伝的要素が多く、主人公＝作者という印象が強かったと思うが、それから脱して、例えば主人公のモデルの可能性として、廬隠の友人たちを考慮に入れるのも一つの方法だ。

但しそれは廬隱の作品の人物には必ずモデルになった人物がいるという意味ではない。もしそう考えたら、また新たな固定観念にとらわれることになる。例えばその作品の書かれた時期や廬隱の経歴や友人たちの当時の状況を照らし合わせるなどによって、もしかしたらモデルとなった人物が浮かび上がるかもしれない。それによって今までとは違う別の視点から、作品を読むことができるかもしれない。その可能性の追求が、今後の廬隱研究には必要なのではないかと考えるのだ。それによって最終的には廬隱が表そうとした悲哀の真の意味が捉えられなければならない。これが今後の廬隱研究に残された課題である。

〔注〕

- (1) 茅盾『廬隱論』（1934年6月7日 『文学』第3巻第1号 1934年7月）
- (2) 茅盾『中国新文学大系（小説一集）・導言』（1935年3月10日 上海文芸出版社 1981年）
- (3) 賀玉波『廬隱女士及其作品』（黄人影編『当代中国女作家論』上海光華書局 1933年）
- (4) 沈鈇『吊廬隱我的先生』（『上海工部局女中年刊』1934年）
- (5) 李梅娜『悼廬隱我師』（『上海工部局女中年刊』1934年）
- (6) 方毓清『追憶黃師廬隱』（『上海工部局女中年刊』1934年）
- (7) 肖鳳編『廬隱年表』（肖鳳編『廬隱』人民文学出版社 1984年7月）
- (8) 謝冰瑩『黃廬隱』（1937年3月24日 『廬隱選集』百花文芸出版社）
- (9) 劉大傑『黃廬隱』（『人間世』第5期 1934年6月5日発行）
- (10) 劉濟群『廬隱的死及其生活片断』（1934年5月30日 『文学』第3巻第1号）
- (11) 唐弢『女作家黃廬隱』（唐弢『晦庵書話』生活・読書・新知三聯書店 1980年9月）
- (12) 曹惠民『廬隱小説風格随想』（『中国現代文学研究叢刊』1981年第2期）
- (13) 肖鳳、孫可『廬隱的生平和創作道路簡介』（肖鳳、孫可編『廬隱選集』百花文芸出版社 1983年）
- (14) 錢虹編『廬隱著作系年目錄』（錢虹編『廬隱集外集』書目文献出版社 1989年5月）
- (15) ①肖鳳、孫可編『廬隱選集』百花文芸出版社 1983年10月
②肖鳳編『廬隱』人民文学出版社 1984年7月（三聯書店香港分店 1983年5月）
③錢虹編『廬隱選集』上・下 福建人民出版社 1985年5月
④錢虹編『廬隱集外集』書目文献出版社 1989年5月
- (16) 楊義『抒情的小説家——廬隱』（『新文学論叢』人民文学出版社1983年第1期）
- (17) 錢虹『論廬隱の後期創作』（『華東師範大学学報・哲学社会科学版』1984年第1期）
- (18) ①範橋葉子編『廬隱散文』中国広播電視出版社 1993年6月
②中国現代名作家名著珍藏本『廬隱・人生小説』上海文芸出版社 1994年5月
③朱珩青編『廬隱小説精編』浙江文芸出版社 1995年2月
④盧君著『驚世駭俗才女情——廬隱』四川文芸出版社 1995年3月
⑤『廬隱小説全集』上・下 時代文芸出版社 1997年3月
- (19) 伍遠吉『論廬隱小説の主観抒情』（『黔東南民族師專学報・哲社版』（凱里）1992年第1期）
- (20) 郭春林『廬隱小評——兼論研究歷史人物的一種方法』（『中国現代文学研究叢刊』1992年第3期）
- (21) 『海浜故人』文学研究会叢書 商務印書館 1925年7月出版所収の①『一個著作家』②

- 『一封信』③『兩個小学生』④『靈魂可以売嗎』⑤『思潮』⑥『余淚』⑦『月下的回憶』の七篇
- (22) 喬以綱『靈魂蘇醒的歌唱——論五四時期的中国女性文学創作』(『天津社会科学』1992年第2期)
- (23) 趙文勝『論“五四”女作家筆下的知識女性形象』(『南京師大學報・社科版』1992年第1期)
- (24) 楊揚『略論“五四”時期女作家的創作』(『中国文学研究』1992年第1期)
- (25) 王洪庚『廬隱与冰心早期小説創作比較』(『山東社会科学』1994年第3期)
- (26) 陸華『論中国現代女作家的創作追求』(『文学評論』1995年第4期)
- (27) ①佐伯慶子『廬隱——その生涯と文学』(『桜美林大学中国文学論叢』第5号 1974年12月)
- ②中本百合枝『五四時期の女流作家廬隱の作品にみえる悲哀の表現』(『国学院雑誌』第87巻第7号 1986年7月)
- ③土屋肇枝『書くことの意味——廬隱試論』(『夏天』創刊号 1992年12月)
- ④土屋肇枝『廬隱とショーペンハウアー』(『人文学報』東京都立大学人文学部 1996年3月)
- (28) 佐伯慶子氏は1937年中国瀋陽の出身。錢虹氏について詳細はわからないが、彼女が編集した『廬隱選集』の後記によると、「『廬隱選集』の収集、編集や廬隱及びその創作に関する研究は1980年に始めた。当時私はまだ大学の中文学部の学生だった。」とある。(錢虹編『廬隱選集』福建人民出版社 1985年5月)
- (29) 廬隱『廬隱自伝』第一出版社 1934年6月15日初版
- (30) 廬隱『或人的悲哀』(『小説月報』第13巻第12号 1922年12月10日)

(1997年6月12日受理)